

モロカイバウンドという映画を鑑賞して感じたのは、善と悪の間で揺れ動く気持ちと、息子と奥さんとの開きすぎてしまった距離感を埋めようと焦ってしまっている主人公の葛藤でした。その焦りで善と悪の区別がつかずに警察沙汰になる暴行事件を起こしたりして、より複雑な問題に発展してしまったように思いました。一度何か悪いことをしてしまうと同じ過ちを繰り返し犯してしまうこと、特に薬物などに手を出してしまうと似たような境遇の人が集まって悪さをしてしまうというサイクルから抜け出せなくなる気がしました。

父親から息子に伝えたかったことは、再犯率の高さ、真面目に生きようと行動を変えるのは難しいというメッセージだと思った。この映画から、間違ったことをしたら、社会復帰するのに長い時間かかること、一度関係が壊れてしまうと信頼を取り戻すのが更に難しくなってしまうことを学びました。

元受刑者の主人公が不器用ながらも努力をして信頼を取り戻していくところが主人公に対する思い入れを強くしてくれて始めは良い映画だなと思いました。ただ中盤と終盤の主人公の行動には正直裏切られたような「なんでこんなことするの？」とずっとモヤモヤした気持ちでした。

仮釈放されてから、社会復帰していくストーリーだと思っていたけど、一つ崩れただけで全部が台無しになるという点が印象に残った。また、映画を英語で見るのは初めてだったので、こういった方法で英語を学ぶのも一つの方法として良いなと感じました。

映画の序盤では禁酒をしたり、息子との釣りなどを通し前妻や息子との関係を修復していく様子が描かれているが、映画の中盤友人からの酒の誘いに乗ってしまっただけで全部が台無しになるといっていい。終盤の息子と主人公の故郷であるモロカイ島を目指すシーンでは親子の愛を感じることもできた。全体的に主人公の考えが甘く、心のどこかでもう自分は更生したから少しくらい悪いことをしても大丈夫、と考えているのかなと思った。ストーリー序盤は社会復帰をするために頑張っていて、子供や奥さんといったいい関係を取り戻そうとして、とても心打たれた。だが、友人達と関わっていくうちにどんどん悪い方向にことが進んでいき、「これだけは絶対やったらダメ」って思っていること全部やっちゃってとても苦しい気持ちになった。必ずしもハッピーエンドとは限らないが、現実味ある人間味ある様子をそのまま描いたとてもいい映画だと思った。

主人公カイノアが息子と向き合うシーンは、とても切なく感じた。やり直したという気持ちは本物なのに、環境や過去が邪魔をする感じがすごくリアル。家族もののヒューマンドラマが好きな人には刺さる映画だと思う。

最初は心の距離が離れていた主人公と息子が、一緒に釣りやゲームを通して徐々に親子の絆を修復していくシーンが心に残った。今まではハワイは観光地というイメージしか無かったが、この映画ではモロカイ島という自然の多い島が舞台になっていたのも、ハワイの違った姿を知ることができた。

この映画を視聴して特に印象に残ったのは、主人公が息子との関係を取り戻そうとする一方で、自分自身のルーツについて向き合っていくところでした。ハワイで生まれ育った人であっても、生活のために英語を使わなければならない現実と、文化や言語との共存の難しさを感じました。

また、ハワイと聞くと観光地としての明るいイメージが強い反面、私たち外の人からは見えにくい家族やルーツへの複雑な思いがあるのだと感じました。観光地で働く現地の人々の置かれている状況は、沖縄にも通じる部分があるように思い、身近な問題として考えることができました。この映画を通して、ハワイに限らず、地

域が抱えている歴史的・社会的な問題や背景を知ることの大切さを知りました。そうした視点を持って作品を観ることで、より深く作品を楽しめるのだと思いました。

主人公がモロカイ島の伝統や故郷を大切に思っている、そこで生活する事が現実的に難しいという状況に考えさせられました。また、主人公が何故ハワイ語を両親が教えてくれなかったのかと問うシーンがあったのですが、それは実はモロカイ島で暮らすことが困難だという現実と、故郷を思う気持ちが入り交じり、主人公のアイデンティティとの葛藤につながっていることがわかりました。

映画の後半は、主人公が大切に思っている故郷への想いを息子に受け継いで欲しい気持ちや、自分のルーツ、アイデンティティを大切にしたいというメッセージが込められていると感じました。

私はハワイが抱える問題についての知識や歴史的な背景についてあまり知らないため、この映画の満足いくまほど理解出来なかったと思いますが、この作品は見る人によって違った視点がり、違った意見が出ると思うので色んな人の意見や感想を聞いて、考えを深めていきたいと思いました。

この映画を通して、ハワイでは、観光業に関連する仕事が多く見られました。「白人と釣りをしないといけない」と言うセリフがあったので、現地の人は生きるために仕方なく観光客を相手にしているように見えました。歴史的背景が関係しており、今でも観光客をよく思っていない人が多いのではないかと感じました。最初は、映画の内容があまり理解出来ませんでした。後半の主人公と息子のやり取りや、モロカイ島に連れて行くシーンでは、主人公は息子に自分の考えを受け継いで欲しい気持ちがあるのかと思いました。また、モロカイ島には、「観光客立ち入り禁止」の表示が沢山あり、ハワイ本島は仕方なく受け入れています。モロカイ島は、反対派が多いのではと感じました。今後はただ映画を見るのではなく、歴史や時代背景などを事前に調べ、理解を深めていきたいと思いました。

物語は主人公のカイノアが仮釈放を機に新しい人生を歩もうとするシーンから始まりますが、映画の前半は人間関係が良好に進み、映画自体が主人公の成長物語かと思いました。しかし、話が進むにつれ主人公の不器用さと人間らしさ全面的に描かれ、奥深く、満足度の高い映画になっています。

物語の後半では主人公が自己中心的な気持ちを貫き通した結果、多くの人間関係が壊れてしまいました。そんな中、カイノアに残ったのは、息子との絆と母親でした。息子を無断で連れ去り一緒にモロカイへ向かう事を決めた時にはついに主人公らしい覚悟をしたなど感動しました。

映画の終盤では母親の元へ辿り着く事ができ無事再会し、息子も一緒にいる点で個人的にはカイノアにとって心が救われ、最も幸せな時間だと思いました。最後のシーンは彼が物語を通して起こした悪い行い(泥棒行為、連れ去り、仮釈放の条件のアルコール禁止を破った事など)の責任を取って警察へ自首したと個人的に考えています。映画の終わりも捉え方次第で賛否が分かれる、とても考えさせられる映画でした。様々な感情、気持ち、絆、現実、雰囲気が感じられて満足度の高い映画でした。

世界中でPRされている楽園リゾートのハワイではなく、ローカル（現地の人々）が向き合う、苦しい現実が描かれた貴重な作品だと感じました。様々な国の文化（ハワイ、タイ、ネイティブアメリカン、等）は白人植民者により娯楽の対象とされてしまい、文化やアイデンティティが奪われた歴史があります。その結果、映画の中でローカルは「観光客が嫌い」と言いつつも、ツーリズムで経済が回っているため、仕方なくホテルの清掃員、ボートクルーズ、フラのショーダンサーとして働いている現状が映し出されていました。沖縄も観光客が多くいますが、ハワイと比べて日本人観光客の方が多いためハワイに比べるとそういった感情が薄いのかもしいないと思いました。

映画の中では、ピジョン語やハワイの言語がところどころ使用されていたのが、特に印象深かったです。俳優の

訛りを含んだ喋り方、おにぎりのことをムスビという呼び方や、文化的な知識（9割以上サンダルを履き、室内では脱ぐ）、などとネイティブハワイアン監督だからこそ取り入れることができたのかなと思いました。また、映画の中で特に印象深かったのは長年刑務所にいた主人公カイノアが自身のアイデンティティと向き合い、息子のジョナサンや母のために良い人間になろうと努力をした姿です。ハワイのルーツについて息子には、名前に誇りを持って、長髪似合うね、ココナッツ（外見茶色中身白い）ではない、などと、息子に必要な助言をする父らしい姿勢を多く見せてくれました。

「モロカイ・バウンド」を視聴して、私は主人公の「カイノア」が自分のアイデンティティに苦しむ姿が印象的でした。ハワイで育ったにもかかわらず、ハワイ語を話すことが出来ない主人公は、ハワイの文化との距離を表しているように感じました。それが彼の葛藤の原点のように思えました。この姿は現在の沖縄とも重なります。沖縄も現在では独自の言葉を話す人は減ってきています。最後のシーンでカイノアが息子を自分の故郷モロカイ島に連れて行った理由は、自分のアイデンティティや故郷を大切にしたいという気持ちの現れだと思いました。

この映画を通して、同じハワイであっても島や地域によって環境が大きく異なることが印象に残った。観光地として発展した島がある一方で、手つかずの自然が残る島も存在し、それぞれの土地で暮らす人々の価値観や考え方も異なるのだと感じた。

特に、映画に登場する親子が異なる出身や育ちだという設定が、出所した主人公が自分自身のアイデンティティを取り戻そうともがく姿と重なり、印象に残った。また、この映画はハワイを舞台としているが、一般的にイメージされる「キラキラした観光地」や「バカンスの場所」とは異なる側面を描いていた。ハワイの現状や、観光客に対する現地の人々のリアルな声が反映されていて、これまで自分が抱いていたハワイのイメージとは違う一面を知ることができた。監督は、多くの人が抱きがちな理想化されたハワイ像だけでなく、観光地化の裏にある現実や、そこで生きる現地の人々の思いにも目を向けてほしいというメッセージも伝えたかったのではないかと感じた。

映画『モロカイバウンド』を鑑賞し、これまで観光地としてしか見ていなかったハワイの姿が大きく変わりました。本作では、ネイティブハワイアンが観光客に対して否定的な感情を抱く理由が描かれており、観光によって文化や生活が影響を受けている現実を知りました。また、主人公の息子が名前の発音を理由に軽くからかわれる場面から、文化的な違いが日常の中で違和感や距離を生むことにつながると感じました。物語の後半では、社会復帰を目指す主人公が飲酒や暴力、万引きに手を染めてしまい、更生が一直線には進まないことが描かれます。それでも、過ちを繰り返しながら自分の弱さと向き合い、立ち直ろうとする姿は人間らしく心に残りました。この映画を観て、ハワイが抱える歴史的背景に目を向けるきっかけとなりました。